

杖  
の  
孫  
免

四  
1冊5  
75  
4



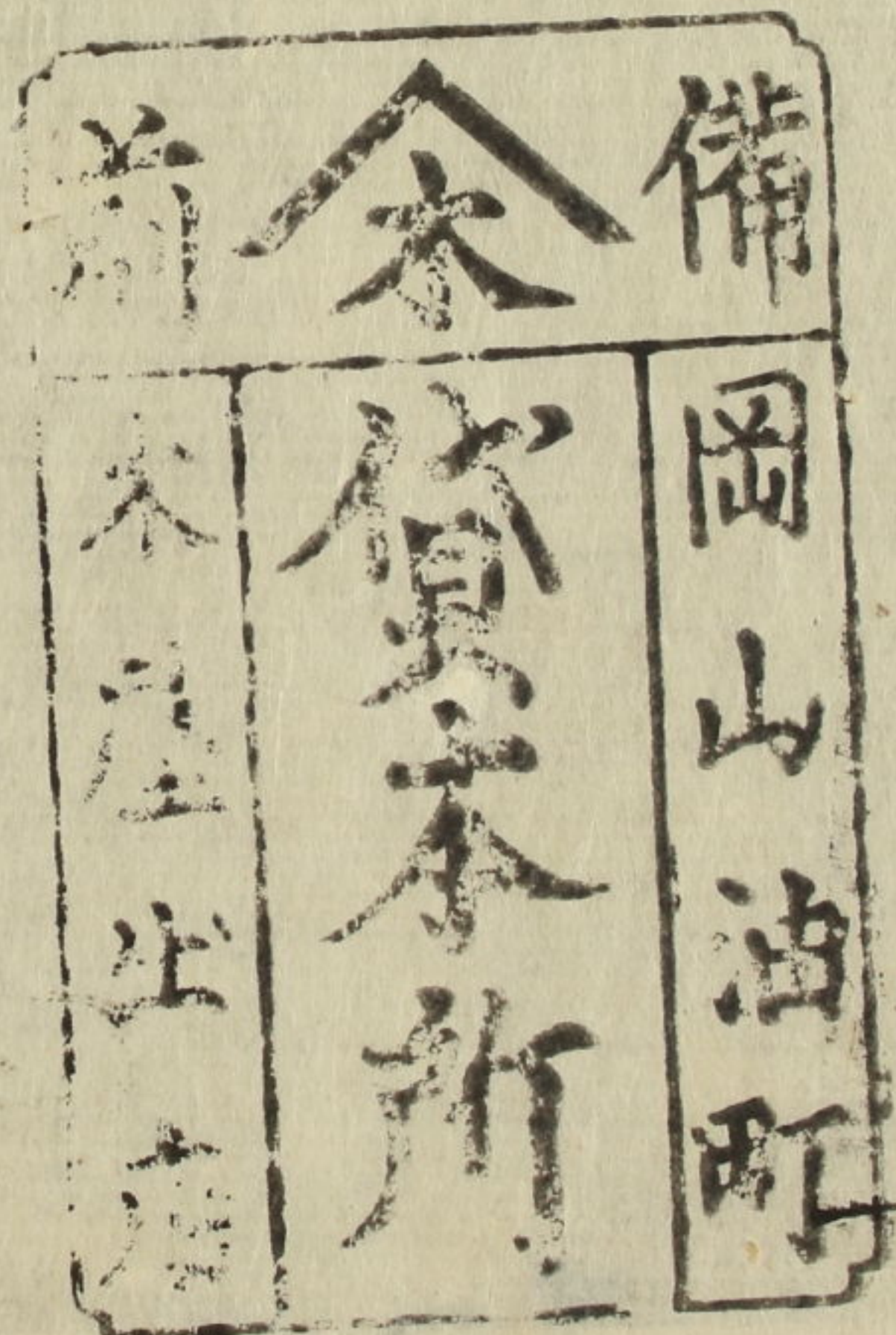


秋の夜骨と巻之四

目録

荻原の産

又申の歌 中野苗字 暮 下女の号  
 因碩察元其の端 陰娼 出所封  
 洛火以後の乱俗 十月月 有儀封を  
 寺田子内桂奇 雲和山洛書 二人奔句  
 奥平の端 京師各目録 詩文連作  
 平僧







之門乃昭之者と門昭及と之今ら形ありて田安  
一ツ移はるり以成ふと之を以て一追居殿大寺殿  
と此寺と云ふ以稱号元來は皆を括之其邊  
わく樹の多と呼あふいは一の橋とありて安  
号ふけありてはく伊能之用ふ事し能見也  
又羽衣のへをハ今も爾武世以下は姓氏も  
是とあめの東園の中を或ハ新田と宗室とし  
て号稱葉は田大穀 里見 香山 世良 田 額  
田 介 等 一 井 岩 松 等 といふれは利 ありて

吉良石堂仁本細川新波今川荒川山名  
島山 柳井 等 といふれは 寺 といふ  
伊 嵩 寺 といふれは 三 川 松 原 といふれは 寺  
と之れの新葉ありて今者松原といふ稱といふ  
新葉は といふれは 長 仁 文 結 伊 能 海 等 井 形  
系 後 井 野 見 新 招 務 屋 行 傳 寺 といふれは 柳  
地 名 といふれは 寺 といふれは 寺 といふれは 寺  
といふれは 寺 といふれは 寺 といふれは 寺  
といふれは 寺 といふれは 寺 といふれは 寺  
といふれは 寺 といふれは 寺 といふれは 寺

後とありて後々へくおまの相平流皆号高し  
元来ハ姓さうなるはしと久々の新くは世茶  
一幸因り成多し可き名れ既く法盛朝  
あしと源姓平姓と名さすて斗うて首字  
のりやとあまの世のあり姓氏ハ次ありて人  
姓名と同一首字し假名と互ふらふ名め  
ありて其人の姓氏定名いけし之やしん親し  
りけしとありて係ありて假名し之ともや  
うも此すたしやうし官府め号と係し之も何  
何なほあると官ハ方名りし也ス字よけし  
何やしあめめめしやめし何太年何い  
あしと同一首字し一古場りるなり  
スめありて一官し一官し一官し一官し  
佛ふま一官し一官し一官し一官し  
さきとありしと久野人とのさし  
びんるし角小羽延の伊凡信山せい  
裏の路りも奥深くいふし一官し一官し  
のりハ定名字の房別りくは何れも

事おろしとぬしとぬしとぬし

○其の中華聖代の興りて古き遊の要る是  
書画のしに鑑む所をわたりて其の  
思ふと漸く之と學ぶるに庸るといふも  
其のそと鑑むるに論するもやれぬと  
其のめは紀多事なりて發しとて事  
作爲の能技といふもなて事  
て道徳ありて其の繁栄の事とて  
ててタルに古にありて其の  
事ありて修飾の事には其の  
ての理を以て或人其の事と書  
是し或人其の事ありて其の事  
○其の下の事といふ事と其の事  
て世人卑下して其の下の事  
れ其の事の中下事と其の事  
其の事林門に入る事と其の事  
名人の事と其の事と其の事  
又先と著る事と其の事

事ありて修飾の事には其の  
ての理を以て或人其の事と書  
是し或人其の事ありて其の事  
○其の下の事といふ事と其の事  
て世人卑下して其の下の事  
れ其の事の中下事と其の事  
其の事林門に入る事と其の事  
名人の事と其の事と其の事  
又先と著る事と其の事





因領ハ後復ハ不復おもえと吹草ヤハ志公  
格斗世ふまの事とおとあハ新なる事  
とまことおもえと事本格故と事  
事まことおもえと事世の人乃然  
せし事知こと事  
否おもえと事

一若夫本因信井とあ井格之者日格めて仲間  
く其若ふよおもえと事  
格深く事

格式要ふく事  
是ハ格和事  
因領は事  
格方知事  
方こと事  
方もし事  
因領方事  
せり事  
こと事

和夫に信登る事  
と事

まゝ道芝書きたりし書をもと稱するを存す  
かみされし子ありて存するを初め書きたり  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
奇抄とみゆりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
人之と書きて因て道芝の書通しし書も存す  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
乃人書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
外不存書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す

○活火以後の書通しし書も存す書きたりし書をもと稱す  
後推しし書も存す書きたりし書をもと稱す  
くも書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
外不存書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
外不存書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
外不存書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す  
まゝの修りせし書も存す書きたりし書をもと稱す  
外不存書きたりし書も存す書きたりし書をもと稱す





藤のよき一から世の事いふはこゝろのよき一  
かゝるに後を細く結しや下よは是れ非や  
方よし川を夢にやむ一はさそとまてか  
こ夢を蒲萄より一はふ一とまゝに  
まはふ程を川を夢にあらはれは  
せとぬと一えし一ふあせこゝろの  
一房の人入身や一と世をこゝろの  
のよき一

○宝曆の以是和仙神降るる  
の事四葉の世の内を

空防ちて暮るるこそ一はけふ時或人

暮るるあゝはさそとぬと一者し

こゝろのよき一はははは

是と云はれよあやう

○壬午七月十日夜は信のこゝろ一はあて目と  
一多るは「柚屋」の事いふは  
例やゝはこゝろの事いふは中村の事いふは  
こゝろの事いふは

○相寄の事ハ余一向はあれと一は









既にしては儀礼のみならず如く重箱と云ふ如く  
方へ借し度と早きは借ると借し去ると宜し  
なる事多く切替の事をも後の事不絶世  
の中は極く心方と云ふ事とありし物にて  
今も借と困て不出目々世の通用はくして一統  
の形困と云ふ是れは古唐年のはともす  
停まらずにありし如く所より由緒はゆき  
ききしもの貸付しはゆき世の貸しはゆき  
法の通用は任政<sup>キ</sup>指<sup>キ</sup>掲<sup>キ</sup>めりて大くとす  
又テスツル

ゆきゆきと云ふ又云ふ借しはゆき  
乃ゆきゆきと云ふ借しはゆき  
行要中よりあるは互に貸しはゆき  
とゆきの仕形はゆきと云ふ  
乃過凡と云ふ之の買人をあらしむる  
くは肝時なり

○和奇の家形を道うして神代ふゆきを  
はゆきと云ふはゆきと云ふはゆき  
ゆきゆきと云ふはゆきと云ふはゆき

紫下と方下ノ雪月凡そ對して  
道標と何ぞも奇に和言ふと  
法度多きをいふは和言ふと  
其下ノ方下ノ其れも古ノ名あり人ノ力ハ  
妙ニ流しきとあるは今のまゝ奇といふ  
乃ハ流滞もあつればやそれ等雨ふ  
也とのく詩ハゆゑの教ハく眼下の事  
と自中におふとて是も伝流と交を  
ここの地の地名ハ用ふとも然る

唐土の地名ゆゑ用ふとて其の事ハ  
是え是れ日本の地ハ和言ふは其の事  
てこの詩ハゆゑの教ハく眼下の事  
所々も其の事ハ用ふとも然る  
近環るく之叶ふ唐土の地ハ和言ふ  
流滞もあつればやそれ等雨ふ  
乃ハ流滞もあつればやそれ等雨ふ  
也とのく詩ハゆゑの教ハく眼下の事  
と自中におふとて是も伝流と交を  
ここの地の地名ハ用ふとも然る



全盛

えん可矣

此の居る所 是れ也

岡山 全盛店 油町

前	全	備
木	貨	岡
屋	本	山
出	所	油
店		町

